

## 行きつ戻りつ

同じ漢字を反復して書くとき、近頃のワープロやパソコンを使ってなら読み方を打ち込んで変換してしまえばいいのだからなんの苦勞もない。でも実際に筆記具で書くとなると同じ字を2度も書きたくないのは人情だ。だいたい読む方も2字重複してならべられると違和感がわいたりするものだ。例えば「戦戦兢兢」「年年歳歳」よりは「戦々兢兢」「年々歳々」の方がそれぞれ2字だけの認識で読める。「々」は読まなくてすむからである。

インドネシア語でも日本語と同じく「どんどん」「がしゃがしゃ」というような反復語が多い。雑誌「じゃらんじゃらん」はインドネシア語だとか。彼の国では俗に「じゃらん<sup>2</sup>」のように2乗の形で書くとか。「きょん<sup>2</sup>」がそれに準じたとは知らなかった。(なお『じゃらん』と書いたのは便宜上で現地では平仮名で書くことはない)

中国でも日本でもむかしから同じ字を反復させるための記号はいろいろと考え使われてきた。

「同」 字数に限らず1塊の文字列を省略するときに使用する。

たとえば一家の姓名を筆頭者だけ書き、つづく者は「同」とする。また1行の文章を受ける場合もある。

「全」 「同」の俗字である。使い方は「同」と同じである。

個人的には「同」の草書体と考える。JIS規格などでは記号としてあつがっているが、実はこの字は姓として使われている。漢字である。

「々」 漢字返しと呼ばれる。この記号の前の漢字ひとつを受ける。

個人的には「全」の略体と考えている。現在はこの字がつづけて使用されることはない。ただし大相撲番付表では「同」「全」と同じように使われている。

「二」 二の字である。

とくに変わった字ではないので特別な名称をつけてない。

右の写真はある神社に建てられている「伊勢代代御神楽奉奏記念樹」の碑である。伊勢太太講とはある村落で村人が金を積



み立て、毎年代表を選んであるいは全員で伊勢神宮に詣でる講である。参詣の際には「太々御神楽」を演じ納める。「太々御神楽」は「太神楽」ということが多い。

この碑では「太々御神楽」を「代代御神楽」と書いている。

ここで注目いただきたいのは写真の碑には「伊勢代二講」と彫られている。ただ「だいにこう」など読まれないように「二」は字面を小さく彫られている。つまり「二」はここでは反復の記号なのである。

「𠄎」 印刷業界では「ピリピリ」と呼ばれる漢字返しである。

字形から見て、上の「二」の変形と思われる。「ピリピリ」の字形は最後を左に払っているが、「𠄎」という形もとるようだ。そのむかし私が幼いころ「同上」の意味で「𠄎」を使っていた。小学校の授業で「お小遣い帳」をつけていた時、上の行を同じだから「𠄎」を書いたら、となりの席からクレームがついた。先生が指導していたのは「# (Ditto Mark)」だったのだ。

方向が違っただけだからいいじゃあないか友達と反論したが、この両者名前も違っていたのだ。「# (Ditto Mark)」は漢字ではないから「二」の字がもとではない。

「ゝ・ゞ」 平仮名返しである。「ゝ」は清音用、「ゞ」は濁音用である。

「大岡(越前守)忠助」は「おゝおかたゞすけ」となる。「おゝゝかたゞすけ」とは書かないようだ。いずれにしても仮名返しになれていない現代人には読みにくいこと限りない。

「ゝ・ゞ」 片仮名返しである。

使い方は平仮名返しとおなじである。

「𠄎・𠄎」 大仮名返しである。「𠄎」が清音用、「𠄎」が濁音用である。

ち り ぢ
-------------

「ちりぢり」は右枠の中の表記になる。

その昔 NHK の「みんなの歌」のスーパーインポーズで『ちり𠄎』と横組

みで使われていたことがあった。子供向けであるのにこう表記したのは、原詞を忠実に再現したのかもしれない。勇気ある行動と賞賛したい。いま、大人の読み物でさえ「大仮名返し」を使うのは稀有であるし、大仮名返しを横組みで使用するのはさらに稀有である。

さて最後に「々」「𠄎」の古文での実際の使い方を日本書紀の中から拾ってみる。

以下の文は日本書紀神功皇后紀の中の解説文である。

今様に読むとAの「々」の個所は「貴国国国」「加羅国国国」と読みたくなるし、Bの「𠄎」の個所は「貴貴国国」「加加羅羅国国」と読みたくなるが、そんな文章があるわけがない。

読み下すと次のようになる。

『百濟記に云く、壬午年新羅貴国につかえ奉らず。貴国沙至比跪を遣わし、之を討たしむ。新羅人、美女二人を莊飾りて津に迎え誘う。沙至比跪その美女を受けて、反りて加羅国を伐つ。加羅国王己本早岐…』

アンダーラインで指示したところが反復された部分である。読み方は現代より単純ではない。

なお、「𠄎」は組版の都合で漢字の右下につけたが、本来は「貴」の位置が正しいようである。

時代劇でお屋敷の部屋の背景をいろどる襖の漢文をよくご覧いただくとうかがうが、各字は同一サイズの正方形の中に書かれ均等に並べられている。字間・行間ともおなじである。漢字なのだから縦組みであるが、横組みに読むあわて者がいても怒れない。

漢語を書く時はこのように、天地左右とも字の中心がきちんと揃っていなければならない。縦方向は一直線、横方向も一直線が美しいとされているのである。補助的な記号、「𠄎」などは漢字の中に並べると漢字の中心が揃わなくなる。

よい例がある。本来漢文では句読点は使わない。仮名交じりの日本語の手紙だって品格の高い

B 百濟記云壬午年新羅不奉貴国遣沙至比跪令討之新羅人莊飾美女二人迎於津沙至比跪受其美女反伐加羅国王己本早岐…	A 百濟記云壬午年新羅不奉貴国々々遣沙至比跪令討之新羅人莊飾美女二人迎於津沙至比跪受其美女反伐加羅国々々王己本早岐…
---	---

ものは句読点を使わない。私がそういう手紙を貰ったことは過去 2 回しかない。1 通は香典返しについていた印刷物のお礼状、もう 1 通は歳暮の手書きでの礼状だった。

現代中国語では日本と同じく句読点を使う場合があるが、本来は、

、	○
---	---

ではなく、

○	、
---	---

の位置に付く。なぜなら、

、	○
---	---

の位置では字の中心揃っているとは言いがたいからである。もっとも最近の中国語は英語の影響を受けて、

、	○	・	、
---	---	---	---

であるが。

この著作権は岡和男に帰属します。  
©Kazuo Oka 2000